



▲一面に広がる田んぼの中で遊ぶ楠葉託児所の子どもたち（昭和27年）。
右上の木立ちは鏡伝池付近、奥の山並みは男山丘陵と考えられます。



▲樟葉小学校の屋上から東側を撮影。中央の木々は鏡伝池がある市民の森。男山丘陵は男山団地に姿を変えています。



▲当時の楠葉託児所の建物を今も利用する楠葉保育園。園内には昔と変わらず子どもたちの元気な声が響きます。

田園地帯から活気ある住宅都市へと変貌した

楠葉

のどかな田園地帯で輪になって遊ぶ子どもたち。今から58年前、南楠葉2丁目の楠葉託児所に通う子どもたちが、樟葉小学校付近の田んぼでお遊戯をする様子を撮影したものです。当時、田植えて忙しい農家を助けるため、お寺や地域の人たちによって「農繁期託児所」が市内各所に設置されていました。「お遊戯のほかにも花摘みや虫捕りをしたものです」と、託児所に通っていた楠葉野田3丁目の樋口和代さん(63歳)は懐かしそうに話します。樋口さんは今、楠葉託児所を受け継ぐ「楠葉保育園」(写真右下)の園長として、子どもたちの成長を見守っています。

写真が撮影された昭和27年、現在の樟葉駅前には葦原の湿地が広がっていました。当時から楠葉に住む80代の男性は「晴れた日にはエビやドジョウを捕る人が訪れましたが、いったん雨が降ると一面は広大な池のようになりました」と言います。水はけの悪さから宅地化は進まず、今よりやや北側にあった樟葉駅は乗降客の少ない閑散とした駅だったそうです。しかし、高度経済成長により住宅地需要が増えつつあった昭和42年、京阪電鉄が「くずはローズタウン」の造成をスタート。京阪電鉄で初めて自動改札機を設えた新しい樟葉駅や、広域型ショッピングセンター「くずはモール街」をはじめ、公園、学校、病院などが計画的に整備され、急速に都市化していきました。5年前の再開発を経た楠葉は今、活気ある住宅都市としてにぎわいを見せています。

(平成22年10月号)